

## 「ウォーナー・リスト」は図書館を空襲から護ったか

中西 裕

### 1

太平洋戦争時に多くの日本の文化財への空襲が回避された事情については、アメリカの美術史家ランドン・ウォーナーがアメリカ政府に対して献言を行った功績が大きいと従来言われてきたが、これに対して吉田守男『京都に原爆を投下せよ』<sup>1</sup>が痛烈な批判を行った(同書はのちに『日本の古都はなぜ空襲を免れたか』<sup>2</sup>と書名を改めて再刊された。以下の引用は再刊書による)。

吉田守男によれば、ウォーナーが作ったとされてきたリスト(通称「ウォーナー・リスト」)は、爆撃を避けるように勧告するためのものではなかった。アメリカ最高裁判所長官であるH・ストーンがルーズベルト大統領に対して「ヨーロッパの美術的歴史的遺跡の保護」と「枢軸国によって略奪された美術品・歴史的文書を正当な所有者に返還する機構の確立」を援助するための委員会の結成を提案、大統領がそれに同意して一九四三年八月、ロバーツ判事を委員長とした通称「ロバーツ委員会」が結成された。のちに検討対象をヨーロッパだけでなく戦争地域すべてに広げた。いわゆる「ウォーナー・リスト」はその委員会が、略奪された文化財のリスト・弁償用の「等価値」の文化財リストを作るための基礎資料だった。吉田は

さらに、京都が大規模な空襲を受けずにすんだのは、京都が原爆を投下する候補地となっており、大空襲か原爆投下か、その「綱渡り」の状態のまま敗戦を迎えたためであると説いている。

吉田守男説は同書によって初めて公表されたのではなく、早い時期から次の論文の形で発表されてきた。

「京都小空襲論」、『日本史研究』二五一号 一九八三年七月二〇日  
一―三四頁

「京都・奈良はなぜ空襲を免れたか―「ウォーナー伝説」の崩壊」、『世界』五八二号 一九九三年五月一日 二八四―二九九頁

「ウォーナー伝説批判―京都・奈良の空襲に関する恩人説の検討」、『日本史研究』三三三号 一九九四年七月二〇日 三〇―五八頁

いずれも京都と原爆の関係を明快に論じている。京都に空襲が行われなかった事情は、アメリカにおいては早くから公文書が公になっていたし、一般書でも、たとえば、これは最初の吉田論文より少し遅れるが、ロナルド・シェイファー著『アメリカの日本空襲にモラルはあったか』には次のように書かれている。

技術的視点からすれば、京都は火炎攻撃の絶好の標的であった。受皿状の土地に広がっていて、普通の防火帯と大半の日本の都市より大きな街路があったものの、中心部の建物は古く、たてこんだ地域の家屋の大部分は木と紙でつくられていた。京都は標準的な焼夷弾技術による火炎旋風で容易に破壊できたであろう。

そして、焼夷弾爆撃にとり絶好の標的であるということは、核攻撃に適しているということでもあった。京都は原爆の炸裂を包み込む大きさであったので、科学者は原爆の効果を測定しやすかった。<sup>3</sup>

これらの資料から、吉田説の言うように、昭和二〇年七月に陸軍長官ヘンリー・スチムソンの反対で却下されるまでは京都が原爆投下の候補地となっていたこと、八月一五日以降も戦争が続いていたら原爆を投下されたかもしれないことは明らかで、異論をはさむことはできない。<sup>4</sup> また、「ウオーナー・リスト」が爆撃回避のためのリストではないことも今日定説となっている。しかし、それではリストに挙げられた文化財のうち、どのくらいが空襲を受けずにすみ、いっぽうどの文化財が空襲の被害を受けたのか、そして、それはなぜなのかという点についてはあまり語られていない。ここでは、吉田説についての書誌的検証を行い、あわせて空襲での被害について、特に図書館施設を中心に実態を検討してみたい。

## 2

いわゆる「ウオーナー・リスト」と呼ばれるのは、*Army Service Forces Manual, M354-17, Civil Affairs Handbook, Japan, Section 17: Cultural Institutions, Headquarters, Army Service Forces, 24*

July 1944. である。もともとこれを「ウオーナー・リスト」と呼ぶのは後述するように、適切ではないと考えるので、以下では仮に「文化財リスト」と呼んでおくことにする。

吉田守男の著書ではその改訂二版である M354-17A, May 1945 を用いている。これが改訂二版であることは、*Report of The American Commission for the Protection and Salvage of Artistic and Historic Monuments in War Areas, United States Government Printing Office, 1946* 通称『ロバーツ委員会報告書』の一五七頁に明記されている。<sup>6</sup>

この二つの版の「文化財リスト」は、小異があるのみだが、序文の部分は改訂二版の方が詳しく書かれている。リスト部分は基本的には同じものであるため、改訂版が作られた時点ですでに焼失していた文化財等も元版のまま載っていることになる。初版が作られた一九四四年という年は、空襲回避を目的とするなら遅いし、四五年五月の改訂二版に至っては手遅れなのである。その点でも吉田説が正しいと言わねばならない。

吉田説を参考にすれば、「文化財リスト」の書名は『陸軍動員部隊便覧 (M三五四―一七A) 民事ハンドブック 日本 一七A・文化施設』と訳される。内容的には日本の主な文化施設・文化財等のリストであり、それに地図を付し、日本文化史概説的な、簡単な序文を付けている。文化施設および文化財等については、その重要度を\*を付けて示しており、最も重要と判断したものには\*三つを与え、重要度の低いものは無印となっている。ただし、この印の意味についての説明が特にあるわけではない。

なお、「文化財リスト」を含む『陸軍動員部隊便覧』の性格については、そのマイクロ資料を所蔵する国立国会図書館の「リサーチ・ナビ」のホームページには次のように記されていることを付け加えておく。

一九四二年五月に戦後の枢軸国等の軍事的占領に備えて開設された米陸軍の軍政学校の一期生、二期生が、軍政に関する専門的な事実の情報の収集に時間を要したところから、一九四二年一月基礎的な事実の情報を集めたハンドブックの編集が開始された。「中略」刊行されたハンドブックは、民政学校<sup>8</sup>が付設された各大学等に教材として配布された。

「文化財リスト」はこれまでに筆者の知る限り三度翻訳されている。①「文化財はいかにして救われたか」<sup>9</sup>に掲載されたもの、②「日本の文化施設への爆撃制限」として、解説付きで訳されたもの<sup>10</sup>、③『日本の古都はなぜ空襲を免れたか』<sup>11</sup>に収められたものである。このうち一番詳しいのは②で、針生一郎の手によってほぼ全訳されている。これに対して①と③はどこよりも、日本人にとって自明である文化財・文化施設の存在する位置についての記述などは省略しており、特に後者は文化財の成立年に関する記述もまったく省いた、きわめて簡単なものである。そのため誤解を与えるような点も見られる。たとえば、③のリストには東京帝国大学が挙がっているが、そこには次のように書かれている。

東京帝国大学 図書館及び文学部史料編纂所書庫

この部分、①では次のようである。

CD4 \* \* 東京帝国大学赤門一八二七

図書館、古文書保存

原文はこう書かれている。

5C/D-4 Tokyo Imperial University; Aka-mon (gate of daimyo

residences), Yedo period, 1827; contains \*\*library, and  
\*\*archives in the Historiographical Institute of the Faculty  
of Letters, one of the largest collections of archives in  
Japan.

原文と照らし合わせると、①では赤門をその成立年とともに挙げている点は正確であるものの、史料編纂所の名前が出てこない。しかし、それ以上に、二つ星が赤門（あるいは大学全体）に付けられているように見えるのが難点である。原文を見れば、赤門は無印であり、図書館と史料編纂所が二つ星であるのは明確である。

ちなみに、この部分の②の記述は次のようになっている。

東京帝国大学 赤門（大名邸の門）、江戸時代。一八二七年。図書館及び文学部史料編纂所書庫、日本最大の書庫のひとつ。〈5C/D-4〉

これが一番的確である。すなわち、東京帝国大学全体が無印でリストに挙げられており、その中では赤門と図書館、文学部史料編纂所書庫が特に重要だとされ、さらに後二者は星一つが付されていることが表現されている。

③には赤門が出てこないが、これは「\*」印が付せられたものだけを挙げるものの方針によるものだから、間違いではない。

ほかにも①の薬師寺の項では、東塔と「黒銅三体仏」つまり金堂薬師三尊像を記しているが、原文の“in building behind Pagoda. \*\*\*standing figure.”すなわち東院堂内の聖観音像（三つ星）を見落としている。いっぽう③は桂離宮の項に隠れている御所（一つ星）を掲出しそこなっている。では②は正確かというと、これまた完璧とは言えない。中尊寺が松島か

ら「四〇マイル」とされているが、原文を見ると“46 miles”である。原文に“founded 794”とある比叡山が「七七四年創建」となっているのも単純な見誤りか誤植かであろう。しかし、近畿地方の中の大坂で、「D 四天王寺」に「村山氏の私有」とあるのは完全に誤っている。原文の書き方が悪いのだが、“Private collection of Mr. Murayama.”は四天王寺の次に改行して挙げたものであり、これは前に「村山長武氏私設コレクション」として挙げてあったものの重出である。<sup>12</sup>

こうした点若干を修正したうえで「文化財リスト」の改訂二版による簡略版を掲げることにする。③の書き方に合わせて、文化施設・文化財の中の個別のものを取り出して示す時には無印は無視する方式で記載する。したがって、かなりの省略をするため、適切な記述ができない部分が生じる。たとえば法隆寺は全体について星三つとされていて、その中に百済観音も書かれているが、特に星はついていないので、この仏像を省略してしまい、それでいて、夢殿の七世紀初期木造観音像は星一つの印があるために記述するという矛盾も生じてしまうことになる。

なお、「文化財リスト」へのランドン・ウォーナーの貢献は必ずしもはつきりとしなく。その名前が *Report of The American Commission for the Protection and Salvage of Artistic and Historic Monuments in War Areas* に出ているのは、“List of Personnel and Consultants”の“Committee of the American Council of Learned Societies”に、“Far East”担当の一人として、文化人類学者のロバート・ハイネゲルデルン、<sup>14</sup> 東洋考古学者オロフ・ヤンセ、胡適、<sup>13</sup> ジョージ・マキューン夫人、白戸一郎、<sup>14</sup> 角田柳作らとともに挙げられている程度に過ぎないのである。したがってこのリストを「ウォーナー・リスト」と呼ぶのは不適當である

うと考える。

作成した表は基本的な構成は M354-17A, May 1945 に準じて記した。そのため、かなり奇妙に感じられる部分もあるが、そのままとした。表にはそれぞれの文化財が空襲による被害を受けたかどうかをもあわせて示した。被害の程度をどう判断するかが難しいが、文化庁編『新版 戦災等による焼失文化財』（戎光祥出版 二〇〇三年一〇月二〇日）に記載がある文化財・文化施設についてはそれに従い、ないものについては筆者の判断で「焼失」とか「一部焼失」のように被害状況をおおまかに記し、被害を受けなかったものについては○印を付して示した。<sup>15</sup> なお、個人コレクションの一部については、被害の程度を測るのが困難であるため、判断を保留した。また、被害を受けた日付をあわせて記した。

表(53-55頁)を見ると、しばしば指摘されることではあるが、被害は城郭に著しい。なぜか。目立つ、攻撃しやすいという理由の他にいまひとつの答えがリストの中にある。例として名古屋城と大阪城の部分を見ると、それぞれ、軍の施設として使われていることが「文化財リスト」に明記されている。原文では、それぞれ “now headquarters for military police”, “now arsenal and military headquarters” と注記されているのである。いずれも軍事施設として使われていると書かれた地点を攻撃目標とするということ自体に無理がある。その意味からも、このリストが文化財を保護するためという性格とは一線を描くことがうかがわれ、むしろ客観的な事実だけを記したもののように見える。言わば、城は本来が戦闘目的の建造物であるがゆえに攻撃を受けざるを得ない結果となった。姫路城は天守閣を焼夷弾が直撃したものの、かろうじて焼失を免れた。「文化財リスト」原文にはこれについても “now divisional headquarters of the

文化財リスト簡略版（改訂2版に拠り筆者が作成）

日本帝国					
弘前	青森県	弘前城		○	
平泉	岩手県	中尊寺, 金色堂		○	
仙台	宮城県	伊達正宗の城 [仙台城]		焼失	1945. 7. 10
松島	宮城県	瑞巖寺		○	
諏訪 (近郊)	長野県	諏訪神社		○	
長野	長野県	善光寺		○	
長野 (近郊)	長野県	神明宮		○	
日光	栃木県	東照宮本殿 (霊廟)	***	○	
甲府 (府中)	山梨県	富士嶽神社		○	
鹿島	茨城県	鹿島神宮		○	
杵築	島根県	出雲大社本殿	***	○	
大垣	岐阜県	大垣城		焼失	1945. 7. 29
岐阜 (近郊)	岐阜県	永保寺開山堂		○	
名古屋	愛知県	名古屋城天守閣, 現憲兵司令部		焼失	1945. 5. 14
		真福寺蔵書		○	1945. 3. 19 大須観音焼失
		熱田神宮		一部焼失	1945. 3. 12, 5. 17
鎌倉	鎌倉県[ママ]	円覚寺舍利殿		○	
		大仏		○	
小田原	神奈川県	益田男爵コレクション		○	
小田原 (近郊)	神奈川県	最乗寺 (道了尊) [大雄山]		○	
福山	広島県	福山城		焼失	1945. 8. 8
岡山	岡山県	岡山城		焼失	1945. 6. 29
吉備津神社	岡山県	神社		○	
姫路	兵庫県	姫路城, 現陸軍師団司令部		一部焼失	1945. 7. 3
神戸 (近郊)	兵庫県	鶴林寺本堂		○	
明石 (近郊)	兵庫県	明石神社 [住吉神社]		○	
根来	和歌山県	大伝法院		○	
大阪 (近郊)	大阪府	金剛寺		○	
		建水水分神社		○	
	兵庫県	住友男爵コレクション		—	
	兵庫県	阿部孝次郎氏コレクション		○	
	兵庫県	村山長拳氏コレクション [村山龍平収集]		○	
山田	三重県	伊勢神宮	***	小被害	1945. 1. 14
山口	山口県	瑠璃光寺		○	
広島 (近郊)	広島県	厳島神社	**	○	
		広島城, 現師団司令部		破壊	1945. 8. 6
下関	山口県	永福寺		焼失	1945. 7. 2
功山寺	山口県	功山寺仏殿		○	
松山	愛媛県	松山城		一部焼失	1945. 7. 26
高知	高知県	高知城		○	
熊野	和歌山県	熊野神社		○	
筥崎	福岡県	筥崎宮 (神道)		○	
香椎	福岡県	香椎神社		○	
タジミ [田島?]	福岡県	宗像神社		○	
福岡 (近郊)	福岡県	九州帝国大学		○	
		図書館	*	○	
太宰府	福岡県	太宰府天満宮		○	
大分	大分県	富貴寺		○	
大分 (近郊)	大分県	宇佐八幡宮本殿		○	
宇和島	愛媛県	宇和島城		一部焼失	1945. 7. 13
長崎	長崎県	崇福寺		○	
熊本	熊本県	熊本城		○	
首里	沖縄県	首里城		焼失	1945. 5. 12 (推定)
近畿地方					
比叡山	滋賀県	延暦寺	**	○	
京都 (近郊)	京都府	仁和寺		○	
比叡山	滋賀県	園城寺	***	○	



稲荷	滋賀県	稲荷神社		○	
石山	滋賀県	石山寺多宝塔		○	
山科(近郊)	京都府	醍醐寺五重塔		○	
桃山	京都府	桃山城, 御陵		○	
宇治(近郊)	京都府	万福寺総門		○	
宇治	京都府	平等院(現在寺院)	***	○	
大阪	大阪府	A・帝国大学		一部焼失	1945. 3. 14 ほか
		図書館	*	○	
		B・大阪市図書館		○	
		C・大阪城 現司令部・兵器廠		被災	1945. 8. 14 ほか
		D・四天王寺, ほぼ再建		焼失	1945. 3. 14
		村山氏個人コレクション		—	
奈良(近郊)	奈良県	薬師寺東塔		○	
		金堂の黒銅三像 [薬師三尊像]	***	○	
		塔背後建物の立像 [東院堂内聖観音像]	***	○	
法隆寺	奈良県	法隆寺(伽藍 [全体])	***	○	
		夢殿の七世紀初期木造観音像	*	○	
当麻	奈良県	当麻寺		○	
室生寺	奈良県	室生寺金堂, 五重塔		○	
		九世紀三木像	*	○	
根来	和歌山県	大伝法院		○	
高野山	和歌山県	弘法大師によってひらかれた三〇の寺院	***	○	
		金剛峯寺(本道場)	*	○	
		御影堂(宝蔵院)	*	○	
京都府					
上賀茂神社			*	○	
修学院				○	
	庭		*	○	
大徳寺唐門(僧門)				○	
大谷大学			*	○	
	付属図書館		*	○	
賀茂御祖神社本殿(神道神社) 再建				○	
鹿苑寺金閣			***	○	
北野神社本殿(天満宮神社) 再建				○	
同志社大学			*	○	
	図書館		*	○	
京都帝国大学医学部				○	
妙心寺				○	
桂離宮			**	○	
	御所		*	○	
京都帝国大学				○	
	東方文化学院図書館		*	○	
慈照寺(銀閣寺)			***	○	
	庭園		*	○	
二条城書院				○	
	障壁画		**	○	
	庭園		*	○	
住友男爵コレクション [泉屋博古館]			***	○	
壬生寺	一〇世仮面コレクションを含む			○	
建仁寺(僧坊)				○	
八坂神社本殿				○	
	五重塔		*	○	
知恩院			*	○	
西本願寺			**	○	
	龍谷大学図書館		*	○	
	障壁画		*	○	
東本願寺			**	○	
ハウカクデン [豊国神社]				○	
	京都帝室博物館		**	○	

清水寺本堂		**	○	
三十三間堂		***	○	
京都市立美術館			○	
智積院			○	
東寺金堂			○	
	彫刻	*	○	
泉涌寺			○	
慈照寺東求堂			○	
龍安寺			○	
<b>奈良県</b>				
秋篠寺			○	
法華寺（尼僧寺）		**	○	
	中宮寺の弥勒菩薩像	***	○	
東大寺正倉院		***	○	
奈良女子師範学校			○	
	図書館	*	○	
東大寺大仏殿		***	○	
東大寺法華堂		***	○	
唐招提寺金堂と小礼堂			○	
興福寺五重塔 [原文は三重塔]			○	
	運慶作彩色木彫像	*	○	
奈良帝室博物館		***	○	
春日神社			○	
新薬師寺本堂			○	
<b>東京府</b>				
護国寺			○	
東方文化学院図書館			○	
東洋文庫（モリソン文庫を含む）		***	○	
早稲田大学			一部焼失	1945. 5. 25
	仏教図書館・博物館	**	○	
東京帝国大学			○	
	図書館	**	○	
	文学部史料編纂所書庫	**	○	
上野公園			被災	1945. 3. 10
	東京美術学校		○	
東京帝室博物館		***	○	
	青銅彫像	*	○	
寛永寺			一部焼失	1945. 3. 10
浅草寺本堂			焼失	1945. 3. 10
皇居			焼失	1945. 5. 25
明治神宮			焼失	1945. 4. 13
団伊能男爵コレクション		**	○	
大倉私設コレクション [大倉集古館]		*	○	
赤坂離宮			○	
日本民芸館			○	
根津嘉一郎氏コレクション [根津美術館の古美術品]		**	○	
増上寺			焼失	1945. 5. 25
帝国ホテル		**	一部焼失	1945. 5. 25
慶応大学			一部焼失	1945. 5. 25
	図書館（日本アジア協会を含む）	*	一部焼失	1945. 5. 25
四十七士の墓 泉岳寺内			○	
原富太郎氏コレクション（横浜）			○	
	臨春閣、聴秋閣の二建築 [三溪園]	**	小被害	1945. 6. 10
井上侯爵コレクション（麻布区宮室町）			—	
岩崎男爵コレクション（本郷区駒込）[静嘉堂文庫]			○	
前田侯爵コレクション（目黒区駒場町）[尊経閣文庫]			○	
住友男爵コレクション（東山区聖護院近く）			—	
細川侯爵コレクション（小石川区高田老松町）[永青文庫]			○	
日本帝国政府部局官庁資料室			—	

Army”と明記してあり、原爆で倒壊した広島城についても“now regimental headquarters”と書かれている。城郭が当時連隊本部や備蓄庫として使われたことについてはリストの序文でも言及されている。

### 3

次に、「文化財リスト」に挙げられた図書館施設について、それぞれ空襲の被害がどうだったかを、事前の防空対策とともに、それぞれの図書館の記録で見えていくことにする。

#### ○九州帝国大学

中央図書館は建物が戦災を免れ、疎開図書もすべて回収できたので、直接戦争の被害を受けずにすんだ。<sup>16</sup>昭和一九年六月に図書の学外疎開が決定され、貴重図書を筑紫郡太宰府神社へ移した。さらに外国雑誌バックナンバーを佐賀県小城郡多久村および同県杵島郡大町町へ疎開した。一万冊の図書は粕屋郡宇美町山手の民家の土蔵二か所に移した。この時にはトラックが使用できず、宇美町馬車組合の協力によって二日間を要した。<sup>17</sup>

#### ○大阪帝国大学

昭和二〇年三月一四日の大阪大空襲で医学部の附属医学専門部（昭和一四年開設）の全建物を焼失、六月七日には工学部の木造建築全部とコンクリート建物の一部を焼失、八月には微研甲子園病院が全焼した。図書館についての記述は今回見るできなかった。

#### ○大阪市図書館

「文化財リスト」原文には“Osaka-shi-Toshokan (Osaka Municipal Library)”と書かれているが、おそらくは現在の大阪府立中之島図書館を指すものと考えられる。当図書館は明治三九年に大阪府立図書館と改称されているのだが、所蔵資料の貴重性などから判断すればそう推定するしかないであろう。

大阪府立中之島図書館は空襲の被害を受けずにすんだ。大阪市立図書館のうち清水谷図書館は昭和一九年三月に建物強制疎開により活動を停止、四月には阿波座、御蔵跡、西野田、城東の四図書館が戦時託児所に転用された。清水谷図書館の蔵書と、この四図書館の図書の一部は元大阪育英商工学校跡に移転して育英図書館と改称し、開館準備に入っていた。ところが二〇年三月一三日の大阪大空襲により、今宮図書館、育英図書館、阿波座、御蔵跡の建物が全焼し、ほぼ全てを失った。<sup>18</sup>その状況の中でほぼ無傷ですんだのは府立中之島図書館と戦時託児所に転用され図書館活動は休止しながらも蔵書が遺されていた市立西野田、城東図書館だけだった。<sup>19</sup>

もっとも中之島図書館にしても空襲から完全に除外されていた訳ではない。二〇年六月一五日の第四次大阪大空襲の際に、館の書庫前に焼夷弾が着弾したが、幸いに消し止められた。また、同月二六日の空襲でもガラスを破損した。<sup>20</sup>

この間、貴重図書の疎開が行われている。昭和二〇年三月に泉南郡大上村大鳴山に木箱六〇〇個に収められた貴重図書が運ばれた。それ以外の貴重図書の疎開については不明な点が多いが、南河内郡磯長村叡福寺、三島郡山田国民学校、三島郡豊川村、奈良市般若寺等への疎開記録があるという。<sup>21</sup>



○大谷大学

貴重図書を疎開させることが提案され、そのための疎開費用二、五〇〇円の下付が上申されたのは一九四四年六月五日。疎開に先駆けて貴重図書疎開特別展を行い、名畑心順図書館長の関係で、岐阜県内の名畑教授の自坊、飛驒・高山周辺の寺院へ疎開されたようだと言録にある。<sup>22</sup>

○京都帝国大学

京都帝国大学では空襲を受けることはなかった。太平洋戦争末期は沢瀉久孝図書館長の時代である。空襲はほとんどなかったが、昭和一八年一月からは空襲に備えて毎日当番制で詰めきり、第三書庫の西側に防空壕を掘り、「京都帝国大学附属図書館防衛団」が結成された。節電と暖房設備不備により、開室時間を短縮し、翌年からは閲覧室も縮小された。一九年六月には図書館所蔵の貴重書三、〇五四冊を嵯峨大覚寺宝蔵・岩倉倉旧跡保存館・府下南桑田郡保津村古川家土蔵・山科随心院・上賀茂演習林附属建物・阿武山地震観測所に移した。<sup>23</sup>ところが医学部の図書を最後に疎開が終わったのは敗戦の前日八月一四日だった。<sup>24</sup>

○東洋文庫

東洋文庫は幸いに空襲の被害を受けずにすんだ。しかし、まったく空襲を受けずに済んだ訳ではなかった。そのことについて、公的な記録に次のように書かれている。

昭和二〇年（一九四五）二月から四月にかけ、空襲そして数次の被爆を被るにさえ至った。空爆の災禍は、文庫部主任であった岩井大慧氏が少数の職員

を率いて対処したために、不幸中ほぼ事なきを得た。<sup>25</sup>

焼夷弾は落とされたが、幸いにも消し止めたものらしい。最悪の事態を恐れて、資料の疎開も行われた。東洋文庫の場合には二〇年五月の理事会で和漢書は宮城県下へ、満蒙語・蔵経などは新潟県下に移送することに決まり、宮城県分四三五、〇〇〇冊、一八トン貨車延べ一五両は宮城県小野田・中新田に疎開したが、新潟県分は準備中に終戦となって、疎開を中止したという。<sup>26</sup>

○早稲田大学

「文化財リスト」原文には“Buddhist library and museum”と書かれているが、「仏教」を付与する根拠は何もなく、リスト作成者の日本への理解度にやや疑問を感じる部分である。「博物館」は演劇博物館のことであろう。

早稲田大学では昭和一六年一〇月の時点、つまり日本が太平洋戦争に突入する二カ月前にはすでに防空演習総合訓練のため、図書館を四時に閉館し、学園の防護団全員で講演を聞いたのちエレクトロン焼夷弾の実演を見学したとの記事が見られる。<sup>27</sup>米英に宣戦布告した後には夜間に開館するために閲覧室の遮蔽幕を取り付ける検分をした。

翌年になると早くも空襲が始まった。昭和一七年四月一八日昼過ぎに米機が来襲し、二、三キロの焼夷弾を、早稲田大学を目標に投下した模様だったが、風下に落下し、早稲田中学校などが被害を受けた。本土最初の空襲だった。これはいわゆるドゥリットル隊と呼ばれるノースアメリカンB二五の編隊で、一六機のうち一三機が荒川・王子・小石川・牛込などを襲

ったものである。都内では三九名の死者を出したが、そのうちの一人は早稲田中学校の生徒であった。<sup>28</sup>

こののち、たびたび防空訓練が行われており、昭和一七年五月には図書館屋上で早稲田高射砲隊の隊員三〇名が防空訓練を行っている。

一八年四月からは図書館第一閲覧室での夜間閲覧を中止し、暗幕をひきまわした。一九年七月頃からは警戒警報が毎日のように発令され、図書館屋上は高射砲隊の監視所となっていた。監視員が屋上にいる間は書庫を閉じ、館員が書庫内を警戒した。この頃からは宿直員を二名に増やし、夜に警戒警報が出た際には図書館員が駆けつけて警備に当たった。同年一二月からは空襲警報が頻発したため、宿直員をさらに一名増やした。

いっぽう、貴重書の疎開作業がこの時期に始まっており、一九年一二月に埼玉県西多摩郡大久野村羽入謙一郎氏方に図書館および演劇博物館の貴重書の一部を疎開させた。

二〇年に入ると毎日のように空襲警報が頻発され昼夜を問わず館員が警戒し、警報発令中は図書館の閲覧を中止した。<sup>29</sup> 教員もこの頃にはそれぞれ書物や貴重品を退避させる措置をとっており、会津八一は日記に次のように書いている。

四月十八日

「略」此の日、恩賜館三階の瓦、書物、額縁等を甘泉園〔注 大学に隣接した公園〕に移す。<sup>30</sup> 「略」

四月二十日

「略」甘泉園倉庫の鍵及恩賜館の鍵を返す。<sup>31</sup> 「略」

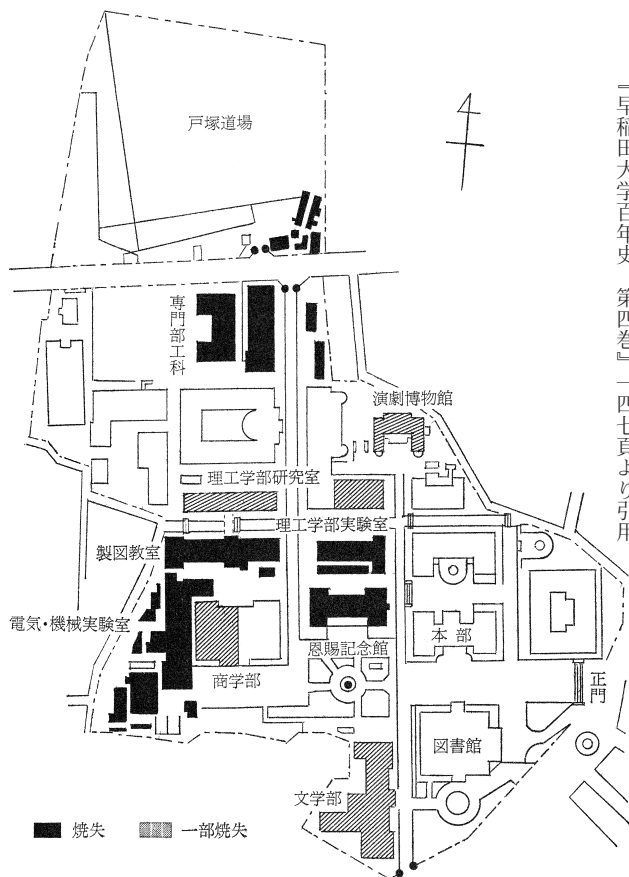
四月二十三日

「略」午前学校に行き、教務課長に甘泉園へ入るべき発掘品を渡し「略」<sup>32</sup>

五月二五日の空襲ではついに大学に焼夷弾数十発が投下され、早稲田大学の多くの建物が全焼した。このときの空襲は夜中の一時二〇分過ぎから中野・四谷・牛込・赤坂・世田谷にかけて五〇〇機を上回る編隊での来襲で三、六〇〇人以上の死者が出ている。<sup>33</sup> その中には教員研究室などがあった恩賜館が全焼し、演劇博物館の屋根部分も燃えている。しかし、図書館および大学本部は罹災を免れた。したがって大部分の図書資料は焼失せずに残ったが、教員が借り出して恩賜館などの建物に置いてあったものな

図 本部キャンパス空襲被害図（昭和二〇年五月二五日）

『早稲田大学百年史 第四巻』一四七頁より引用



どは焼けた。

演劇博物館や図書館が焼失を免れたのは職員が消火に努めた結果であった。演劇博物館の場合には宿直室で寝泊まりしていた警手山川義孝父子が、火が階下へ回るのを二時間にわたって必死の思いで防いだ結果だった。図書館や大隈講堂にも焼夷弾が落ちて炎上するかと思われたが、宿直職員たちの懸命の消火活動で救われた。結果として前頁の図に見るとおり、理工学部関係の建物に被害が大きく、文学部・商学部などが一部焼失、本部や図書館は焼けずに残った。<sup>34</sup>

会津八一はこのとき新潟に疎開していた。そのため、伝聞でこのことを聞いた。

五月二十七日

〔略〕昨夜、宮城、各宮家、慶応、文理大等に空襲ありし由。<sup>35</sup>〔略〕

早大も焼けたことを知るのはしばらくたってからのことであった。

六月三日

〔略〕早大文学部各研究室、恩賜館、理工学部焼失、福田、相馬安雄罹災のよし、宮川、荻野、田路等数人からの報導<sup>〔マヤ〕</sup>にて明瞭となる。甘泉園は無事なるよし<sup>36</sup>〔略〕

恩賜館にあった会津の研究室は焼けたが、甘泉園にあった倉庫に避難させていた古瓦など発掘品や書物はかろうじて難を免れた。

このうち図書の疎開の動きが加速され、六月には埼玉県大里郡八基村の今井清一・左次氏方と長野県下伊那郡山本村竹佐の市村家にトラック半分ほどが疎開された。後者は当時の早稲田大学演劇博物館長河竹繁俊の生家

である。八月に入ると図書の疎開先として秩父郡吉田町の肥土家を借用することが決定され、さらに別の疎開先も探しながら、小寺謙吉文庫などの荷造りが始まった。

こうして荷造りを始めたが、八月一五日の終戦により、その作業が急遽中止される。図書館日誌によると、この日正午に玉音放送によって国民は終戦を知らされるのである。その日記には次のように書かれている。<sup>37</sup>

八月十五日（水）晴

宿直 宮川、福原

本日正午一億国民涙を吞んで大東亜戦争終結を告ぐ 陛下御親らの放送を拝聴す 誠に痛憤限りなし「聖断」如何ともなす事を得ず

日誌はそのあとにすぐ次のように続く。

前十時疎開事務打止めの命を聞く（館長） 荷造人一人来館正午退出す

館長が誰かからの命を聞いたのか、館員が館長からの命を聞いたのか不明確だが、この記述を信じる限り、疎開作業を中止するようにとの指示は玉音放送前にすでに出ていたということになる。

こうして一七日からは荷解きが始められ、全員でその作業を行い、一月一杯までかかった。<sup>38</sup>

○東京帝国大学

東京帝国大学は、千葉市にあった第二工学部校舎等の一部が空襲のために焼失したものの、本郷キャンパスはほとんど無傷で残った。<sup>39</sup>

それでも、昭和二〇年三月九日の東京大空襲の際には本郷三丁目付近の

炎上によって赤門への延焼の恐れが生じた。火は大学側の本郷薬局まで燃えてきたが、当夜の宿直当番だった当時文学部助手であった海後宗臣ほか数名が消し止めた。<sup>40</sup> 当時の東京美術学校校長上野直昭の三月一〇日の日記には、「本郷に入り大学をぬけて徒歩出勤。十二時を過ぎる。お茶の水より湯島、大学赤門近辺迄焦土」と書かれている。<sup>41</sup> 焼け残ったのは奇跡的であった。

防災対策は早い時期から行われており、太平洋戦争開戦前の昭和一六年七月一〇日に「図書館網を被る」という記事が『帝国大学新聞』に載ったという。黒に緑を少し混ぜた色で藁を塗って作った擬装を図書館に施した。<sup>42</sup> また、図書館の防護団も同じ時期に作られ、団長は市河三喜図書館長、団長代理及び総務班長は河合博司書官、総務班長代理は中田邦造司書官が務めた。<sup>43</sup>

文部省では東京帝大の一部を仙台に移転させようという動きがあり、これに対して大学側では近隣の千葉に移転させる計画を立てた。しかし、諸般の事情から大学全体での疎開は実施されず、図書などの疎開が一部行われたにとどまったとされている。<sup>44</sup> 図書の疎開については東京大学図書館の歴史を記した『色のない地球儀』に詳しく記されている。それによると、昭和一九年二月一四日、土井司書官が東大の防空心得パンフレットによって、二五〇キロ爆弾は五層の建物も突き抜けることを知り、中田司書官に貴重書を安全な所へ疎開させることを提案した。こうして山梨県市川大門町にある「青州文庫」（渡辺邸）に同年八月に疎開が行われ、翌年六月に第二次疎開が行われた。その数はインキュナブラ、霞亭文庫、切支丹関係貴重書、梵文写本など第一次三〇八箱、第二次五〇箱に上った。<sup>45</sup> また、学部等の単位でも疎開が行われた。その受け皿となった成田図書館の記録から関係のある部分を摘記する。

昭和一九年

三・七 東京帝国大学法文学教室備え付け貴重図書疎開。トラック一台に満載当館に到着、原田教授外四名同行来館。

三・二九 東京帝大図書館司書青野伊予児、武田の両氏疎開図書見聞の為に来館。

九・三〇 第二回帝大図書の疎開あり。

昭和二〇年

八・四〜六 帝大法学部疎開図書福島県へ再疎開することとなり原田教授以下学生三名来館準備す。<sup>46</sup>

東洋文化研究所でも、「事務員正木園子の縁故を頼って」福島県耶麻郡上三宮村の願成寺に、大木幹一寄贈の漢籍など五五、四五〇冊を三月と六月、三回に分けて鉄道で送った。<sup>47</sup>

○東京帝室博物館

美術品の扱いについてはここでは触れないが、博物館所蔵の図書について若干の記録が残っている。「当館蔵品及法隆寺献納并貴重図書武蔵陵墓地内倉庫へ移送ニ関スル件」として昭和一七年七月一〇日付で立案された書類に次の文言がある。

昨年九月東京帝室博物館蔵品中最優秀品並法隆寺献納御物合計三三三四点ハ防空ノ目的ヲ以テ奈良帝室博物館収蔵庫ニ移送致候処武蔵陵墓地内倉庫此程落成ニ付更ニ当館蔵品及法隆寺献納品（帝室博物館御預）ハ左記方針ニヨリ選択セル別紙目録ノ品六六三三三点並当館所蔵図書中貴重図書五五五点ヲ同倉庫ニ格納ノ為移送致度此段相伺候 〔以下略〕<sup>48</sup>



この何は一八日に大臣決裁を受けた。こうして図書を含む美術品は守られたが、博物館の建物も戦災を免れた。

#### ○慶応義塾大学

慶応義塾では昭和一九年夏ごろから重要資料・重要図書の疎開計画が立てられ、同年暮れから翌年三月中旬ごろまでの間に疎開を完了した。疎開先は山梨県甲府市和田平町の寺田重雄（注51文献では重蔵）宅の土蔵一棟、新潟県中魚沼郡十日町の倉庫であった。これに加え、二〇年八月には長野県更級郡稲荷山町の土蔵にも書籍が疎開された。<sup>49</sup>

三田地区の慶応義塾が空襲を受けたのは昭和二〇年五月二四日、二五日、二六日の三回、いずれも夜間であった。普通部校舎・商工学校校舎・大講堂・文学部史学科考古室などが被爆し、焼失した。大学校舎は被爆したが幸いに損害はなかった。これに対し、亜細亜研究所は飛び火により一部焼失した。焼失したのは煉瓦造りの大講堂を除きすべて木造建物だった。図書館にも二五日には飛び火があったが、消火された。しかし二六日には図書館が被爆し、「新書庫屋根裏および八角塔から発火、書庫屋根裏は直ちに消火、書庫への延焼防止成功したるも、八角塔の火は閲覧室、事務室に延焼、消火困難」となり、二八日に鎮火。書庫への延焼が防がれたのは事前の防火措置として、「屋根裏可燃物の除去、書庫屋根裏階段を鉄板にて閉鎖」が行われていたことが功を奏したとしている。<sup>50</sup>

昭和二〇年三月の図書疎開の際には、八日に汐留駅に運んだところ一〇日に汐留駅が空襲を受けた。万事休すと思われたが、九日には発車して難を逃れた。疎開先の寺田家は七月の甲府市空襲で焼けた。しかし、土蔵は猛火の中を持ちこたえたという。<sup>51</sup>

図書館が被爆した際に職員が消火に努めたことが火を最小限にとどめたが、事前に可燃物を撤去した功績はそれ以上に大きかった。屋根裏の可燃物の中には木製の書架もあり、それらを破壊して焚木とする柄沢主事の英断が幸いしたのであった。

結果として塾全体で焼失建物は三田で五三％と、全国私立大学中最も戦災被害の大きなものとなったが、図書の大半は救われることになった。

#### 4

「文化財リスト」に載らなかった図書館ではどうだったか。いくつかの図書館を例示的に見ることにする。

#### ○帝国図書館

昭和一八年一〇月、帝国図書館は約一〇〇、〇〇〇万冊の貴重図書類の疎開計画を立てた。山岳地帯でコンクリート建ての建物二、三の候補の中から県立長野図書館を選んだ。文部省の許可を得て一八年一月一二日、貴重書等約六六、〇〇〇冊が搬入され、閲覧室の半分および特別閲覧室に保管することとなった。翌年五月一日には第二次疎開として、特別和漢書六一、〇〇〇冊、学位論文三、〇〇〇冊が到着、八月二二日には第三次疎開として重要図書、帝国学士院等の依頼本、洋書の稀覯本等三、四〇〇冊が到着した。

しかし、翌二〇年になると戦局が激しくなり、三月にはこれらの資料を飯山高等女学校へ再疎開することとなり、一三、一四日に飯山高等女学校へ発送された。これらの図書は戦後無事に帝国図書館に戻った。建物自体も被害を免れ、国際子ども図書館として現存していることは周知のとおりである。



○県立長野図書館

長野図書館所蔵図書自体についても疎開は行われた。二〇年七月一三日、郷土資料を長野市外丹波島岡沢万常宅に疎開、二四日には貴重書を上水内郡浅川村舍利、鶴田亀之助宅へ疎開、さらに八月八日から一日にかけて追加の疎開が行われた。これとは別に約一、〇〇〇冊を更級郡塩崎国民学校等六団体へ疎開を兼ねて特別貸出の形で保管を依頼した。一三日には長野市などに銃爆撃があったため、さらに上水内郡御山里国民学校へも疎開させようと準備中に終戦を迎えることとなった。<sup>52</sup>

○東北帝国大学

昭和二〇年七月一〇日夜半からの仙台空襲において図書館のある片平地区の木造校舎はほとんど焼失したが、図書館は飛び火で床が焦げた程度ですんだ。<sup>53</sup>

それに先立ち、貴重資料の疎開も行われた。国宝二点は金庫に入れて書庫内で守ることにし、貴重図書三、〇〇〇冊を県内の三か所、志田郡志田村、黒川郡大衡村、宮城郡広瀬村の個人の土蔵に移した。<sup>53</sup>

○文理科大学図書館

福原麟太郎が『かの年月』で次のように書いている。

「文理科大学では、」図書館とそれにつづく書庫は、ようやく焼失を免れたらしいが、二階三階の南半は内も焦げている。要するに国民学校と西館とが助かったただけで、あとは南館も、寄宿舎も、道場も、教育相談所も、みな灰である。<sup>54</sup>

○二松学舎図書館

二松学舎は昭和二〇年三月の空襲で校舎のほとんどを焼失した。その時、図書館の書庫だけは、当時の職員尾崎憲三教授の尽力と鉄製の扉によって延焼を免れた。<sup>55</sup>ところが戦後になって、屋根が破損したので修理のために屋根を取り外しておいたところ、雪や雨が電線を伝わって書庫内に流れ込み、雷堂先生（創立者三島仲洲三男復。二代目舎長、初代学長）からの寄託図書を破損した。

○拓殖大学

同大学の場合には『百年史』に、次のように簡単な記述がある。「昭和二十年五月二十五日、本学は戦災に遭い甚大な被害を受けたが、図書館は幸運にも焼け残った。<sup>56</sup>」

○関西学院大学図書館

重要図書の分散疎開に昭和二〇年五月から着手し、七月までに有馬郡塩瀬村名塩国民学校、川辺郡川西町花屋敷奥小路民蔵邸、武庫村友行国光宣揚会道場に計約九、〇〇〇冊を移した。国民生活科学研究所においても旧産業研究所収集資料の一部を川辺郡西谷村切畑に疎開させた。<sup>57</sup>

○天理図書館

昭和一九年二月には文部省国宝調査室から国宝の疎開について依頼を受けたが、必ずしも安全ではないと結論したところから会談は不調に終わった。しかし、九月には大阪朝日新聞社から『朝日新聞』創刊号からの完全セット木箱約一〇個を委託された。その一方、館内の貴重図書の疎開が検

討され、富永牧太館長が山間地帯の天理教会を調査したが、交通・管理その他を考慮して、樺本町岩屋ヶ谷の前田禎造氏宅を選び、前後二回、鉄製書類函を荷車で運搬した。<sup>58</sup>

#### ○徳島県立光慶図書館

昭和二〇年七月三日から四日にかけての徳島市大空襲により、書庫の外部構造を残すだけで館舎および在庫資料のすべてを焼失した。岡島幹雄館長が四日付で県知事にあてて「光慶図書館全焼状況並ニ結果処理左記ノ通報候也」と被害を報告し、あわせて自身の免職を申し出ているが、その中に「疎開セシ書籍」として、「阿波国文庫中ノ逸品、世界的珍宝ト称サル稀覯図書全部六百六十冊ハ六月二十八日ニ徳島市上長谷一九二（八万町）相木六郎氏方倉庫ニ疎開保管中」とあり、また「一般図書約三千五百冊」は国民学校、青年学校等に分散疎開させていたことが書かれている。<sup>59</sup>

#### ○大分県立図書館

昭和二〇年三月に大分・宇佐の海軍航空隊が爆撃を受け、以後県下に空襲が始まった。このため佐伯文庫、府内藩関係の松栄神社文書などの貴重書等が四月から七月にかけて竹田図書館や大分郡野津原や東植田の国民学校へ疎開された。また県下の青年学校に新刊書を取りまぜ二〇冊を一組とした文庫を二カ月ごとに各校間で取り換える方法で保管してもらおう方式を実施した。あわせて定価の三倍程度の保証金を預かって館外貸出をも行った。しかし、県立図書館は七月一六日に疎開できなかった図書とともに焼失した。<sup>60</sup>

以上、「文化財リスト」に載った図書館以外は目についたものを拾ったに過ぎないが、それぞれの図書館で貴重図書については疎開を行い、燃えやすいものを除去するなどの措置をとっていた。その一方で公共図書館などでは図書館を他の目的に転用することが行われ、地方の図書館では都市部の図書館の疎開図書を預かることもしばしばあったことが知られる。また、それにとまらず、図書以外の施設としても利用されることがあった。先に記した大阪の戦時託児所の例もそうだが、例えば、金沢文庫は昭和二〇年一月には海軍航空技術廠が物品疎開を行い、六月には海軍航空隊が兵士宿泊に利用した。横浜市図書館には横浜連隊区司令部が入った<sup>61</sup>というように、軍の施設として利用されたケースもある。

東京都内の図書館についての損害調査結果を見ると、次の数字が挙げられている。

罹災館数	都立一四、市立二、私立二、計一七、
罹災坪数	都立一、六六六坪、市立二三二坪、私立七〇坪、計一、八六七坪
罹災図書冊数	都立四三三、六六七冊、市立二一、五六九冊、私立五、〇〇〇冊、計四五二、二三六冊 <sup>62</sup>

#### 5

太平洋戦争時の日本への空襲は、昭和二〇年三月一〇日のいわゆる東京大空襲を境にして大きく変化した。昭和一九年一月マリアナ諸島に基地をかまえた第二二爆撃軍はハンセル准将の指揮下で生産設備・物資の貯蔵所・通信施設・交通機関などの主要目標に対して爆撃を実施した。これを「精密爆撃」とアメリカ軍は呼んだ。その特徴は大編隊を組んで一万メー

トルにも及ぶ高高度から昼間に爆撃を行うことであった。ところが、偏西風の影響をまともに受けるこの方法は目標への投下が難しく、十分な効果がないと見られた。精密爆撃と言っても今日のピンポイント爆撃と違い、誤差は大きかったようである。<sup>63</sup>そこで二〇年一月ハンセル准将は司令官の職を更迭され、代わってルメイ少将が指揮官となった。交代して三月から取られたのが地域焼夷弾爆撃、つまり無差別爆撃である。これは夜間に編隊を解いて低空から爆撃する方法である。その最初が三月一〇日の東京大空襲であった。

ここで「文化財リスト」をふたたび見る。このリストが必ずしも文化財・文化施設の爆撃を回避する目的で作られたものではないことはすでに記したとおりである。リストに載っていないながら焼失した数は少なくない。しかし、にもかかわらず、よくこれだけ残ったとの感慨を覚えざるを得ない。なぜ残ったのか。爆撃回避のリストに載っているわけでもなく、精密爆撃は平均して九千メートルの高空からで誤差が大きい。地域焼夷弾爆撃は二千メートル前後の低空からではあるが、夜間の爆撃である。<sup>64</sup>仮に回避のためのリストが別に存在していたとしても、そして、照明機群が先に目標地点をつきとめて焼夷弾をもって発生させた火災によって目標を標示したとしても、夜間では回避はいっそう難しいであろう。<sup>65</sup>

皇居の場合を見ると、皇居は当初爆撃を避けるように指示されていたところ、*The Army Air Force in World War II, vol. V*の翻訳である『米陸軍航空軍史』に次のように記されている。

操縦兵たちは、ワシントンからの命令によって、皇居をさけるように命ぜられていた。「なぜなら日本の天皇は、現在のところ負債ではなく、後から財産

になるかもしれないから」。<sup>66</sup>

結果的には昭和二〇年五月二五日の空襲により皇居は大きな被害を受けることになるのだが、<sup>67</sup>当初この命令は守られていた。しかし、この種の指示はどのような形で操縦兵に伝えられたのか。作戦命令にはそのことが記載されていないようなのである。

『ニューヨーク・タイムズ』の一九四五年三月一〇日「記録的な空襲」(ブルース・レイ記者)に東京大空襲について次のように書かれている一節がある。

「略」この攻撃は、もっとも慎重に計画されたものだった。

搭乗員にたいしては、非常にこまかい指示が与えられ、飛行機は文字どおり完全に整備された。<sup>68</sup>

作戦実施の際に具体的に誰がどのような細かい指示を与えていたのか。アメリカ軍は作戦の都度、攻撃目標の模型を作り、教官が爆撃航程について説明を行っていた。それを示す写真が残っている。一例を挙げれば、八幡製鉄所の円形の模型を前にして二人の教官が航空兵と見られる人物などに説明を行っている。<sup>69</sup>以上を考え合わせると、「文化財リスト」に挙げられた建物か別のものを問わず、なんらかの方法で爆撃回避が伝えられていた可能性が完全に否定されたわけではないように思える。

大学や図書館についても爆撃が回避された事情にオーナーの関与があったとする噂はつきまといっている。早稲田大学の場合には、理工学部関係の被害が大きいのに対して図書館や演劇博物館が焼失を免れたのは「ピンポイント爆撃」によって、あえて「文化財リスト」に載った対象を避けた

とする噂が戦後すぐにささやかれた。東京帝国大学は周辺が焼かれた中でほぼ無傷で残った。何らかの意思が働いたとの説にはそれなりに説得力があり、完全に否定しがたい部分が残る。

それにしても空からの爆撃を回避するのは、京都のように原爆投下の候補として避けられた地域、あるいは爆撃が人口の多い順になされたために後回しにされた奈良や鎌倉のような中小都市は別として、爆撃を受けた都市の中で、限定して回避することは無理であろう。初期の爆撃について、『米陸軍航空軍史』には次のように書かれている。

初期の精密爆撃計画は、日本上空での目視条件を想定していた。この想定が誤りであることを経験は示した。一月十九日の川崎・明石攻撃では、爆撃は優秀であったが、それ以後どの作戦でも目標上空で目視の気象をみいださず、照準点から三、〇〇〇フィートの半径以内に命中した爆弾は、一七パーセント（「不満足」と格づけされる）から〇パーセントまでまちまちであった。<sup>70</sup>

別のところにも同じような数字が記されている。<sup>71</sup>

では低空での爆撃はどうだったかと言えば、四一%を目標の約三〇〇メートル以内に投下することができたとされている。<sup>72</sup>しかし、これではある地域一帯を爆撃する際に、特定の建物を避けるのは不可能である。アメリカ軍は空襲の前には偵察機がそれぞれトライメトロゴン・カメラで都市の詳細な写真を撮り、模型を作り、リト・モザイク法と呼ばれる方法で座標を決定して爆撃を行った。そうしてもこの程度の精度であった。

そこから考えると、図書館を爆撃回避するのは無理であろうから、早稲田大学図書館・演劇博物館、あるいは慶応義塾図書館の例のように宿直職員などの消火活動によって救われたという側面が大きいのではないか。

あるいは建物の構造による面も無視できない。浅草一帯が丸焼けになった中に東本願寺と金竜小学校だけがポツンと焼け残った有名な写真がある。金竜小学校の場合にはそこへ避難した人たちがプールの水をバケツリレーして焼失をくいとめたとされる。写真で見ると同小学校はコンクリート造である。そのことが幸いした。東本願寺も本堂内部は全焼したが、外郭はコンクリートだったために残った。木造の建物が多かった当時、図書館の多くはコンクリート造だった。その構造が図書館を救ったのであろう。

それにも増して図書館を守ろうとする多くの人々の努力が、図書館を焼失から守ったと言えるのではないか。先の例には挙げなかったが、静岡県立葵文庫は昭和二〇年六月一九日の大空襲に遭った。木造部分に火が燃え移った際、勤めていた加藤忠雄は、金庫の中に水の入ったコップを入れておいたために中のものが助かった話を思い出し、椅子に登って上げ下げ窓の筒の部分へ水を入れてやっと消し止めた。建物に焼夷弾二発を受けたが、閲覧室の天井は破られないで助かった。鉄筋コンクリート部分が堅固であったためであると、加藤自身が後年書いている。職員の努力と構造が相まって焼失から免れたものであった。<sup>73</sup>あるいは宮崎県立都城図書館でも昭和二〇年八月六日の空襲で市街地の三分の一が焼失する中、飛び火した図書館で消火が間に合い危ういところで難を免れた。<sup>74</sup>想像を絶する人命が損なわれた空襲の中で必死の思いで図書館を守ろうとした先人が存在したことをもっと知る必要がある。

「文化財リスト」に載った図書館以外の例もあわせ考えると、何らかの意思が爆撃を回避した可能性を完全に否定できないものの、「文化財リスト」は直接図書館を守ることには寄与していないと判断するのが適切であり、ウォーナー神話はこの面からも否定されるべきである。



- 注
- 1 吉田守男著『京都に原爆を投下せよ』角川書店 一九九五年七月三〇日
  - 2 吉田守男著『日本の古都はなぜ空襲を免れたか』朝日新聞社 二〇〇二年八月一日（朝日文庫）
  - 3 ロナルド・シェイファー著 深田民生訳『アメリカの日本空襲にモラルはあったか』草思社 一九九六年四月二五日 二〇三頁。なお原著は次のとおり。  
Ronald Schaffer, *Wings of Judgment: American Bombing in World War II*, Oxford University Press, 1985.
  - 4 ただし、原資料についての吉田訳がすべて正しいというわけではない。瑣末な一例を挙げると、吉田の前掲書四九頁に、ロバーツ委員会のメンバーとして列記されている中の一人、A・マクライッシュの肩書を「議会図書館員」と表記しているが、原文では“the Honorable Archibald MacLiesh, former Librarian of Congress”と書かれている。原文に単語の脱落があるようにも思うが、「前議会図書館長」と訳すべきものである。このでの“Librarian”は図書館長の謂である。
  - 5 以下「ロバーツ委員会報告書」と略す。なお、同書は日本の公的機関では国立国会図書館と国立民族学博物館の所蔵しか確認できていない（前者は破損のため現在コピー不可となっている）が、リプリント版（オンデマンド版）がグーグルブックスで購入できる。筆者の用いたものはそれによっている。
  - 6 原文は“They were sent in photostatic copies to the Army Air Corps and to the Office of the Provost Marshal General, where a handbook was prepared and issued in July 1944. A second, revised edition was published in May 1945.”
  - 7 厳密に言えば、若干の訂正が改訂版では行われている。元版の「NAGARO」とあったものが改訂二版では「NEGORO」「根来」に訂正されている。  
<http://mavi.ndl.go.jp/kensei/entry/CAH-1.php> 二〇一〇年九月二九日  
最終確認
  - 9 『藝術新潮』八巻一二号 昭和三年二月一日 二七三―二八六頁
  - 10 「日本の文化施設への爆撃制限」、『東京大空襲・戦災誌』編集委員会編『東京大空襲・戦災誌 第三巻 軍・政府（日米）公式記録集』東京空襲を記録する会 一九七三年一月二四日 九二五―九三四頁
  - 11 吉田守男前掲『日本の古都はなぜ空襲を免れたか』五九―六一頁  
なお、この「文化財リスト」も改訂二版の訳であることは訳してある序章から明確である。
  - 12 原文“Hu Shih”
  - 13 原文では“Tehiro Shirato”と書かれているが、誤植であろう。
  - 14 なお、同書では名古屋城の戦災焼失が昭和二〇年五月二四日であると二か所に記されているが、他の資料で見える限り名古屋城の焼失は五月一四日と考えられるので、一四日とした。
  - 15 西日本図書館学会九州図書館史研究委員会編著『九州図書館史』千年書房 二〇〇一年一月九日 一六九頁
  - 16 同前 一六九頁
  - 17 『中之島百年―大阪府立図書館のあゆみ』編集委員会編『中之島百年―大阪府立図書館のあゆみ』大阪府立中之島図書館百周年記念事業実行委員会 平成一六年二月二五日 一六九頁
  - 18 同前 一七〇頁
  - 19 同前 一七四頁
  - 20 同前 一七〇頁
  - 21 同前 一七二頁
  - 22 大谷大学百年史編集委員会編『大谷大学百年史 通史編』大谷大学 二〇〇一年一〇月一三日 四〇二―四〇三頁
  - 23 京都大学附属図書館編刊『京都大学附属図書館六十年史』昭和三六年三月三〇日 一七二頁、および京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史 総説編』京都大学後援会 平成一〇年六月一八日 一二一―一二七頁
  - 24 前掲『京都大学百年史 総説編』一二一―一二七頁
  - 25 東洋文庫編刊『東洋文庫八十年史 I 沿革と名品』平成一九年三月三一日 二四頁
  - 26 同前
  - 27 早稲田大学図書館史編集委員会編『早稲田大学図書館史―写真と資料



- で見る一〇〇年』早稲田大学図書館 平成二年九月十五日 六〇頁
- 28 早乙女勝元『図説 東京大空襲』河出書房新社 二〇〇三年八月三〇日 六一頁
- 29 前掲『早稲田大学図書館史』六〇頁
- 30 『会津八一全集』第七卷 中央公論社 昭和四四年四月二〇日 二四三頁
- 31 同前 二四六頁
- 32 同前 二四九頁
- 33 前掲『図説 東京大空襲』一五三頁
- 34 早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史 第四卷』早稲田大学出版部 一九九二年一月二〇日 一四五―一四六頁
- 35 前掲『会津八一全集』第七卷 二六一頁
- 36 同前 二六三頁
- 37 前掲『早稲田大学図書館史』六五頁
- 38 37によると図書館は九月一日から再開し、ただし午後四時閉館とされた。四時以降は全員が荷解き作業に当たった由である。
- 39 岸田日出刀『焦土に立ちて』には「四月十四日本郷から小石川一帯が焼けた折、旧一高の教室だった平家建煉瓦造の外壁を薄桃色に塗り上げた建物が焼けた。それは大正の半ば頃、わたくしの一高在学中三年間の学窓でもあったので、その焼跡に立つてちよつと寂しい気がした。／大学構内で焼けたのはこれ位のもので」とある（岸田日出刀『焦土に立ちて』乾元社 昭和二二年八月一五日 四二頁）。
- 40 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 通史二』東京大学出版会 昭和六〇年三月一日 八四六―八四七頁
- 41 芸術研究振興財団・東京芸術大学百年史刊行委員会編『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇第三巻別巻 上野直昭日記』ぎょうせい 平成九年三月二五日 四〇頁
- 42 薄久代編著『色のない地球儀』同時代社 一九八七年一月二五日 一一三頁
- 43 同前 一一四頁
- 44 前掲『東京大学百年史 通史二』八四五―八四六頁
- 45 前掲『色のない地球儀』一四〇―一四三頁
- 46 『成田図書館八十年誌』成田図書館 昭和五六年六月五日 一三九―一四一頁
- 47 東京大学東洋文化研究所編刊『東洋文化研究所の五〇年』平成三年一月一日 五頁
- 48 東京国立博物館編『東京国立博物館百年史 資料編』第一法規出版 昭和四八年四月三〇日 一〇七頁
- 49 慶応義塾編刊『慶応義塾百年史 中巻後』昭和三九年一月二〇日 八九六頁
- 50 同前 八九六―八九七頁。『朝日新聞』一九四五年五月二七日の記事にも「主なる被害施設」として、外務省、運輸省、大東亜省、読売新聞社、文理科大学、増上寺、中華民国大使館などとともに慶応大学が載っている。
- 51 慶応義塾大学三田情報センター編刊『慶応義塾図書館史』昭和四七年四月一日 伊東弥之助執筆
- 52 県立長野図書館編刊『県立長野図書館三十年史』昭和三四年一月三〇日 八一―八四頁
- 53 東北大学百年史編集委員会編『東北大学百年史 四 部局史一』東北大学研究教育振興財団 平成一五年五月三一日 八八―八九頁
- 54 福原麟太郎『かの年月』吾妻書房 昭和四五年五月三〇日 一一九頁
- 55 『二松学舎百年史』二松学舎 昭和五二年一月一〇日 六三六頁 および二松学舎大学広報課より聴取。
- 56 拓殖大学創立百年史編纂専門委員会編『拓殖大学百年史 部局史編』拓殖大学 平成一四年三月三〇日 三五―一頁
- 57 『関西学院百年史 通史編一』関西学院 一九九七年五月二〇日 六三七頁
- 58 天理図書館編『天理図書館四十年史』天理大学出版部 昭和五〇年四月一八日 一〇〇頁
- 59 徳島県立図書館編刊『徳島県立図書館八十年史―新館移行への記録』平成一〇年三月三一日 一一頁
- 60 前掲『九州図書館史』三九四頁

- 61 神奈川県図書館協会編刊『神奈川県図書館史』昭和四一年八月三十一日 二  
三〇頁、一一―一二頁
- 62 「東京都戦争被害」(東京都総務部調査課 昭和三年七月)、前掲『東京大  
空襲・戦災誌 第三卷』三七―七八頁
- 63 森山康平「精密爆撃」で狙われた都市、平塚 榎緒編著『米軍が記録した日  
本空襲』草思社 一九九五年六月五日 三四―四三頁
- 64 奥住喜重・早乙女勝元著『新版・東京を爆撃せよ―米軍作戦任務報告書は語  
る』三省堂 二〇〇七年七月二〇日 六九―七〇頁
- 65 もっとも AN-APQ-1 とゴウレーダーで、夜間でもかなり自由に作戦  
ができたという証言もある(前掲『新版・東京を爆撃せよ―米軍作戦任務報  
告書は語る』一四―一頁)。後の AN-APQ-7 はさらにその一〇倍の解像力  
があった(奥住喜重著『中小都市空襲』三省堂 一九八八年七月一五日 四  
八頁)。
- 66 『米陸軍航空軍史』、横浜市編刊『横浜の空襲と戦災 四 外国資料編』一  
九七七年一月三十一日 五〇頁
- 67 中澤昭著『東京が戦場になった日』近代消防社 平成一三年三月一〇日 三  
〇四―三〇七頁。ここには一般的にはあまり知られていない皇居の被災の状  
況が書かれている。それによると、正殿・表宮殿・奥宮殿を含む二七棟、一  
万八千平米余が焼け、消火作業の中で消防官一六名を含む三四名が死亡した。  
延焼を食い止めるために建物を破壊するにも宮内庁の許可が必要で、そのこ  
とが被害を大きくした。
- 68 前掲『東京大空襲・戦災誌 第四卷 報道・著作記録集』五二―二頁
- 69 工藤洋三・奥住喜重編著『写真が語る日本空襲』現代史料出版 二〇〇八年  
八月三〇日 二七頁。模型の写真は『TARGET TOKYO 日本大空襲』月  
刊沖繩社 昭和五四年三月一〇日 二二―二二二、三二―三二五、四七  
三頁にも掲載されている。
- 70 『米陸軍航空軍史』、前掲『横浜の空襲と戦災 四 外国資料編』三五頁
- 71 荒井信一著『空爆の歴史―終わらない大量虐殺』岩波書店 二〇〇八年八月  
一〇日(岩波新書) 一二八頁によればハンセルの精密爆撃では最良の戦果を

あげたときでも一四%の爆撃精度であった。

- 72 前掲『写真が語る日本空襲』四二―四五、六四―六五頁
- 73 加藤忠雄「葵文庫の防火活動」、『日本の空襲 四 神奈川・静岡・新潟・長  
野・山梨』三省堂 一九八一年七月一〇日 二三八―二三九頁
- 74 前掲『九州図書館史』四三七頁

#### 参考文献

- 赤木祥彦「米軍がつくった戦争時の日本地図」、『地理』五五卷一、通巻六五四  
号 二〇一〇年一月一日 九―一五頁
- 今村新三著『大原美術館ロマン紀行』日本文教出版 一九九三年一月一日
- 大阪市立中央図書館編刊『大阪市立図書館五〇年史』昭和四七年三月三十一日
- 奥住喜重・日笠俊男著『ルメイの焼夷電撃戦―参謀による分析報告 米軍資料』  
岡山空襲資料センター 二〇〇五年三月一〇日
- 早乙女勝元著『図説 東京大空襲』河出書房新社 二〇〇三年八月三〇日
- 小山仁示訳『日本空襲の全容―マリアナ基地 B-29 部隊 米軍資料』東方出版  
一九九五年四月二五日
- 名古屋空襲誌編集委員会編『名古屋空襲誌・資料編』名古屋空襲を記録する会  
一九八五年一〇月一〇日
- 日笠俊男著『空襲の史料学―史料の収集・選択・批判の試み』大学教育出版 二  
〇〇八年九月二日
- 松田延夫著『益田鈍翁をめぐる九人の数寄者たち』里文出版 平成一四年一月  
二五日
- 資料の引用に当たって、書名を含め、漢字は旧字体を新字体、アラビア数字は  
一部漢数字に直した。また、英文は一部の書体を改めた。資料の閲覧に当たって  
は国立国会図書館および同憲政資料室、早稲田大学図書館のお世話になった。

(なかにし ゆたか 文化創造学科)